

文化蛙学.近代日本人とカジカガエル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 保科, 英人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10608

文化蛙学. 近代日本人とカジカガエル

Cultural amphibiology in the Japanese modern monarchical period: a river frog, *Buergeria buergeri*

保科 英人*
(福井大学 教育学部
人文社会系部門 理科教育領域)

I. 国鉄今庄駅とカジカガエル

種の保存法対象種であるヤシヤゲンゴロウの人工増殖の研究に取り組みました故奥野宏先生と言う方がいた。以下、生前の先生にうかがった話である。現在の JR 西日本の北陸本線の敦賀―南今庄駅の間にある北陸トンネルが 1962 年に開通する以前、当時の国鉄にとって同区間は峠越えの難所であった。そして、同区間を鉄道が運行する時は今庄駅でパワーのある牽引車両に入れ替えていたようだ。当然のことながらその作業のために、鉄道は長時間今庄駅に停車するわけだが、奥野先生ら今庄の子どもたちはその時を狙って車掌さんに生きたカジカガエルを差し出し、そのお礼として絵の具などを貰っていたと言う。もちろん、現在の JR の職員が勤務中に駅でこのような取引を行えばただでは済まない。時代を感じさせる何とも牧歌的な物々交換だ。なお今庄産のカジカガエルは京都の料亭などに売却され、その鳴き声で客の心を和ませていた。さてさて、当時の国鉄の車掌の行為はささやかな小遣い稼ぎだったのか、それともあくどいボロ儲けだったのか、今となってはわからない。

日本産カエルのうち最も美しい声で鳴くのはカジカガエルと言われている。古来日本人は清流に生息するカジカガエルの鳴き声を愛してきた。平成の現在、カジカガエルをカネで買おうとすれば玄人向けの特別な専門店に行くしかない。しかし、明治・大正・昭和戦前期の日本では決して安い金額ではなかったが、一般人でもカジカガエルを町中で購入することができた。そして、ハエなどの生餌を用意し、多大な労力を払いカジカガエルを飼育する人々も少なくなかった。近代日本人にとってカジカガエルは、我々現代人よりも遥かに身近に感じていたカエルだったのである。

平成の現在、カジカガエルのペット動物としての需要は薄れた。しかし、今なお清流でカジカガエルの鳴き声に耳を傾ける日本人は多くはないがゼロではない。俳句や短歌の題材とされることもしばしばである。本稿では我々日本人のカジカガエルへの親近感に着目し、近代期の日本でのカジカガエルにまつわる文化を概説することとする。

(キーワード：文化蛙学, カジカガエル, 近代, 新聞)

* Hideto Hoshina

(Faculty of Education, Humanities and Social Sciences, University of Fukui, Fukui, 910-8507)

II. 方法

本稿は近代日本の新聞記事を主な調査対象資料とし、当時の人々とカジカガエルとの関係に着目した。そして、カジカガエルが如何ほどの値段で取り引きされていたかを特に重点的に調査した。

本稿で引用した東京朝日新聞、読売新聞、都新聞、中央新聞、大阪毎日新聞、毎日新聞、東京横浜毎日新聞、東京毎日新聞についてはそれぞれ「東京朝日」、「読売」、「都」、「中央」、「大阪毎日」、「毎日」、「東京横浜毎日」、「東京毎日」との略称を用い、萬朝報については紙名をフル表記した。また、明治、大正、昭和をそれぞれ M, T, S との略号で表した。本稿における新聞記事の引用は以下のような書式となる。

明治 27 年 11 月 22 日付都新聞 : M27. 11. 22. 都

明治 37 年 2 月 8 日付東京朝日新聞 : M37. 2. 8. 東京朝日

大正 3 年 8 月 4 日付萬朝報 : T3. 8. 4. 萬朝報

昭和 16 年 12 月 8 日付読売新聞 : S16. 12. 8. 読売

III. 各論

①大工の日当をはるかに超えたカジカガエルの価格

明治・大正・昭和戦前期の新聞記事より得られたカジカガエルの価格を表に記した。価格が掲載された年代（西暦及び和暦）、新聞名および掲載日を記述した。その他、比較材料として東京朝日新聞の年代ごとの 1 部の値段および大工の日当を表に挿入した。東京朝日新聞は大正 10 年に夕刊の発行を開始した。表中の大正 10 年以降の東京朝日新聞 1 部の値段は朝刊の値段である。

明治大正期、カジカガエルの値段はスズムシやマツムシ、ホタルと同じく「虫相場」との欄の中で紹介されるのが常であった（保科, 2017a）。しかし、昭和以降になるとカジカガエルの市場価格は虫相場の欄から姿を消す。その理由は定かでない。後述するように、昭和戦前期カジカガエルにまつわる記事は散見されるものの、取引価格に関する数字が記事中にあまり見えなくなる。昭和期の価格は昭和 13 年度のものしか表に載せられなかったのはそのせいである。しかも、昭和 13 年度の数字は超安売り店での下等個体の値段にすぎないことも付け加えておこう。

表からは同じ年でもカジカガエルの価格差が非常に大きいことがわかる。この理由については本章②と③で後述するが、市場に出回ったカジカガエルは個体ごとに上等、下等と言ったランク付けをされて、その差が値段に反映されたからである。ここは一部例外を除き、同種の売り物であれば、ほぼ同じ価格で取り引きされた鳴く虫やホタルとは根本的に異なる点である（保科, 2017b; 2018）。

表中で 5 円、10 円と記されたカジカガエルは上等扱いで取り引きされた個体である。大工の日当と比較すると、上等とされたカジカガエルがいかに高級品かがわかる。明治 38 年には 30 円もの値段が付けられた個体が売られていた。大工の日当の 30 倍以上である。その日当を仮に現在の 1 万円なり 2 万円なりと換算すれば、当時の上物カジカガエルは現在の血統書付きの犬猫か、高級熱帯魚のような、かなりの贅沢品であったことがわかる。最安値のカジカガエルでも東京朝日新聞 1 部の 10 倍以上の場合が殆どであるから、現在のクワガタムシの生き虫ぐらいの価値はある。カジカガエルは下等個体と言えども、縁日で親が子に気軽に買ってやれるものではなかった。ちなみに、明治大正・昭和戦前期の鳴く虫は最も高かったアオマツムシでも 1 円ちょっと、最安のスズムシは新聞 1 部のせいぜい数倍以下の銭で買えた（保科, 2017b）。カジカガエルはとにかく高かった、の一言に尽きる。

カジカガエル本体もさることながら、カエルを飼育する容器も安くなかった。昭和 10 年代、金網付の容器は大が 1 円 30 銭、中 90 銭、小 50 銭との価格が付けられていた（S13. 6. 22. 読売）。明治 20 年代中頃には 10 円もする飼育用の水盤金網が売られていたと言う（M25. 8. 14. 読売）。

表 明治・大正・昭和戦前期のカジカガエルの価格

西暦	和暦	カジカガエル	典拠新聞	東京朝日	大工日当
1884年	明治 17年	24 銭～10 円	読売. 6.14		
1885年	明治 18年	15 銭～3円	東京横浜毎日. 6.19		43 銭
1886年	明治 19年	10 銭～20 円	毎日. 7. 2		40 銭
1887年	明治 20年	12.5 銭～50 銭	読売. 7.28		42 銭
1890年	明治 23年	1～1円 50 銭	東京朝日. 6.26	1銭	42 銭
1892年	明治 25年	30～50 銭(雌雄ペア. 籠付き)	読売. 4. 24	1.5 銭	44 銭
1892年	明治 25年	15 銭～5円	読売. 8.14	1.5 銭	44 銭
1895年	明治 28年	50 銭～1円	萬朝報. 6. 20	1.5 銭	
1897年	明治 30年	20～50 銭以上	東京朝日. 6.22	1銭	81 銭
1900年	明治 33年	25 銭～1円	萬朝報. 6. 11	1.5 銭	85 銭
1902年	明治 35年	5～28 銭	東京朝日. 6. 8	1.5 銭	88 銭
1902年	明治 35年	20 銭～1円	読売. 6. 8	1.5 銭	88 銭
1903年	明治 36年	25 銭～10 円以上	東京朝日. 5.31	1.5 銭	85 銭
1903年	明治 36年	10 銭～数十円	読売. 6. 27	1.5 銭	85 銭
1904年	明治 37年	15 銭	読売. 7. 11	1.5 銭	81 銭
1905年	明治 38年	20 銭～30 円	読売. 6. 23	1.5 銭	88 銭
1907年	明治 40年	15～30 銭	都. 5.28	2銭	1円
1909年	明治 42年	50 銭以上	都. 8.26	2銭	1円9 銭
1910年	明治 43年	3～25 銭	東京朝日. 7. 6	2銭	1円 11 銭
1912年	明治 45年	5～10 銭	東京朝日. 4. 8	2銭	1円 19 銭
1917年	大正 6年	50 銭～8 円	運輸日報. 6.19	2銭	1円 29 銭
1919年	大正 8年	10 銭～7 円	中央. 6.27	2銭	2円6銭
1920年	大正 9年	40 銭～5 円以上	読売. 6. 5	3銭	2円 93 銭
1921年	大正 10年	40 銭～5 円以上	読売. 5. 7	4銭	3円8銭
1922年	大正 11年	40 銭～5 円以上	読売. 6. 3	4銭	3円 30 銭
1924年	大正 13年	50 銭	読売. 7. 11	3銭	3円 50 銭
1926年	大正 15年	50 銭～15 円	東京朝日. 7. 1	3銭	
1938年	昭和 13年	15 銭(相場の半額の安売り店)	読売. 6.22	4銭	2円 43 銭

注) 運輸日報は原紙は現存せず. 雑誌『昆虫世界』21 卷 239 号より孫引き.

注) 東京朝日新聞1部の価格は保科 (2017b) を参照して作成. 同紙は明治 21 年創刊.

注) 大工の日当は森永 (2008) より引用. 銭以下は四捨五入. 空白年は日当不明.

カジカガエルの価格に関することで、鳴く虫やホタルと事情が大きく異なるのは、カジカガエルが品切れの影響を受けやすかった点である。様々な年代で「近年カジカガエルの飼育が流行して品薄となり、どうたらこうたら」との記事が見受けられた。そして、品薄になると途端に価格が高騰したのである。その影響は飼育容器にまで及んだ。例えば、明治 10 年代初めに大阪でカジカガエル飼育が流行した際は、飼育に必要な水盤金網が品切れとなり、わざわざ東京まで買いに行く人間がいたそうだ (M11. 7. 19. 読売)。

近代期に売られていたカジカガエルとホタルはほぼ天然個体のみである。スズムシやマツムシなどの鳴く虫は養殖物と天然物が共に市場に出回っていた。このうち、鳴く虫については大正 7 年の日比谷公園の納涼祭の開催で、主催者側が市内の鳴く虫をことごとく買い占めたが故に、虫屋から商品が枯渇したことがある (T7. 8. 6. 東京毎日)。しかし、これはかなり例外的な事例であり、鳴く虫の品薄状態は養殖業者の飼育失敗、つまり供給側のアクシデントによって引き起こされる場合が殆どであった (M40. 8. 3. 都)。ホタルの場合は乱獲によって生息地から姿を消すことがしばしばであったが、代替場所の開拓により毎年大量のホタルが東京市場に投入されていた (保科, 2018)。一方、カジカガエルの品薄そして価格高騰は消費者側の需要の高まりに起因するものであり、これもホタルや鳴く虫の事情とは大きく異なる点である。

②カジカガエルの価値は“西高東低”

近代期の一連の新聞記事では、東京市場にもたらされたカジカガエルの産地として、多摩、青梅、八王子、秩父、日光、箱根、小田原、甲斐、静岡、信州、京都鴨川 (加茂川との表記も多いが本稿では鴨川に統一)、京都嵐山、伊勢鈴鹿山、紀州熊野、函館などの地名が挙がっている。筆者が把握している限りでは、九州及び四国のカジカガエルが東京に持ち込まれたとの記事はない。このうち東京から最も遠いのは函館であるが、明治 25 年の記事中に産地として出て来ると言うのだから驚かされる (M. 25. 4. 24. 読売)。

縁日で売られていた鳴く虫は天然個体も相当量が流通していたが、産地はほぼ関東に限られ、遠方から東京に持ち込まれた形跡はない (保科, 2017b)。一方、ホタルの場合には近江、昭和初期には福岡からも大量に移送されていたので、商品の原産地の多様さとの点でホタルとカジカガエルは一見似通っているように思える。

しかし、ホタルとカジカガエルでは大きく事情が異なる。明治後半以降、遠方の地域のホタルが東京に移送されるようになったが、これは単に東京近郊のホタルが乱獲の結果捕れなくなってしまい、やむなく地方からホタルを取り寄せていたからに過ぎない (保科, 2018)。福岡のホタルが関東のホタルと比して人気があり高値で売られていた、と言うわけではない。一方、カジカガエルの場合は特定の産地がブランドとしての地位を持ち、高額で取引されたとの点に特徴がある。以下、関連記事をいくつか抜粋してみた。

- ・箱根富士川産カジカガエルは京都鴨川に比べて音色が劣らないので、値段は同額 (M34. 6. 16. 東京朝日)。
- ・カジカガエルは京都鴨川産が上等。それに次ぐのが静岡産 (M35. 6. 8. 読売)。
- ・カジカガエルは京都嵐山のものが上等 (M36. 5. 20. 読売)。
- ・カジカガエルは京都鴨川を第一。続いて甲斐の鰍澤、信州、静岡、箱根、小田原も上等。川越、秩父、上総は下等 (M36. 6. 27. 読売)。
- ・京都鴨川 30 銭、箱根産 25 銭、秩父産 15 銭 (M40. 5. 28. 都)。
- ・関西産カジカガエル 15～25 銭だが、秩父産は 3～5 銭 (M43. 7. 6. 東京朝日)。
- ・カジカは中国筋のものをもっとも良い声で鳴く (T7. 6. 3. 読売)。

京都や中国地方産個体が上等とされ、静岡産もまあまあ、一方、秩父や川越産が下等扱いされるなど、カジカガエルの“西高東低”の傾向は明らかである。明治 34 年の東京朝日新聞の記事では、箱根産と鴨川産が同等とされるが、「京都鴨川に比べて音色が遜色ないから」と鴨川産カジカガエルが評価基準とされているところも見逃せない。

では、なぜ京都鴨川産が上等とされたのか、商品としてのカジカガエルは鳴いてなんぼのものである。当時まず鴨川のカジカガエルの音色が良いとされたこと、そして、通常野外から捕獲してきたカジカガエルは飼育を始めてもすぐに鳴かないが、京都鴨川産のものは買ったその晩から鳴くから、との認識が人々の間にあったことが理由として挙げられよう (M42. 8. 26. 都)。

動物分類学的に見てカジカガエルの地理的形態変異はそんなに著しくないと言う (前田・松井, 1989)。よって、「京都鴨川産の個体の音色は他地域のものに比べ格段に優れている」との近代愛好家たちの認識が果たしてどこまで科学的に妥当なのかどうか。筆者は両生類の分類のド素人なので確言は致しかねるが、動物学的には胡散臭いと言わざるを得ない。実際、飼育の達人の中にも「鳴き声が産地によって違うと言われるが、自分の実験によればその差はない。飼育法の如何によるのではないか」とカジカガエル愛好家たちの従来の常識を疑う者もいた (S12. 6. 15. 東京朝日)。

そもそも当時の動物形態学の知見でカジカガエルの産地間の個体識別を正しくできたのかどうか。「鴨川産個体は相対的に肉付きが良く、一方、甲州産は臀部に角張った部分があるので、これで識別できる」と自信を持つ人もいたが (M36. 6. 27. 読売)、この形質だけで皆が本当に区別できたのかどうかも相当アヤシイと言わざるを得ない。DNA 分析なんぞなかった時代である。関東産の個体を京都鴨川産と偽って売っていた商人も中にはいたのではなからうか。

京都鴨川のカジカガエルがブランドを確立していたのは、平安貴族たちの和歌に詠まれていた等、文化的側面に基づく複数の理由が考えられるだろう。実は、ホテルの場合でも価格に反映されていなかったとはいえ、京都宇治産ホテルは東京産と比較して 2 倍光るとの認識が明治 20 年代の虫業界にはあった (保科, 2017a)。近代東京人の古都京都に対するある種の憧れと考えるのは穿った見方であろうか。

③年齢や体格によって価格の桁が違ったカジカガエル

平成の現在ペット専用の葬儀屋はいくらでもある。そして、戦前期の日本にもペットを弔う習慣はないでもなかった。なんと大正中頃にはカジカガエルの葬式を行う強者 (つわもの) もいたのである (T6. 9. 24. 東京朝日)。本章②でカジカガエルの産地間の価格差に言及した。実は、カジカガエルの価値を左右するのは産地もさることながら、年齢や体格などの個体ごとの特徴も大きな要因であった。

明治・大正・昭和戦前期のカジカガエル関連の新聞記事には「アラ虫」「新虫」「新物」「荒れもの」などの単語を時折見かける。これは当歳物ないしは捕獲したての個体を指す。最後の「荒れもの」とは荒れ狂っているとの意味ではなく、単に「新物 (あらもの)」の当て字と思われる。一方、「込虫」「困ひ」「鳴請合」との単語はある程度の期間飼育され、人工飼育下でも鳴くようになった個体のことである。当時はどうやら野外から捕ってきて、飼育間もないカジカガエルは中々鳴かなかったようなのである。ペットとしてカジカガエルを飼う意義はほぼ鳴き声を聞くことに集約されると言ってもよい。だとすれば、長年飼われて人工環境に慣れ、よく鳴くようになった個体がより高額で取引されるのは当然である。以下、カジカガエルの個体の飼育期間による価格差を表す新聞記事を抜粋してみた。

・捕らえたばかりで籠になれておらぬ「アラ虫」は昨年まで 15 銭、「込虫」は 25 銭。取り分け声が良いものは 30～50 銭。今年は 24, 25 銭から高い物は 5 円～6 円。堀田下谷区長が飼っているものは 10 円もする (M17. 6. 14. 読売)。

・籠慣れしたカジカガエルは 1～3 円。下物 50 銭以下。あら虫は並 15 銭である (M18. 6. 19. 東京横浜毎日)。

- ・カジカガエルが近年流行. 安いものは 10 銭だが, これらは新虫である. 府下で有名なものは 20 円もする (M19. 7. 2. 毎日新聞).
- ・数年間飼いとおした最上等は 1 ~ 5 円. 本年捕りたる「荒れもの」は 15 ~ 20 銭 (M25. 8. 14. 読売).
- ・20 ~ 30 銭のカジカガエルは飼育しても鳴かない (M30. 6. 22. 東京朝日).
- ・最近捕らえたカジカガエルは 20 銭, 1, 2 か月すれば 50 銭に跳ね上がる. 「囲ひ」と呼ばれる久しく飼いならしたものは 1 円 (M35. 6. 8. 読売).
- ・7 ~ 8 年たったもので音色が良いものは 10 余円もする (M36. 5. 31. 東京朝日).
- ・新しいカジカガエルは 20 銭 ~ 25 銭, 「鳴請合」になると 50 銭 ~ 1 円. 2, 3 丁先まで声を飛ばす特別な個体はなんと 20 ~ 30 円もする (M38. 6. 23. 読売).
- ・当歳もの並 10 ~ 20 銭. 上 50 銭. 2 歳以上 50, 60 銭 ~ 1 円 20 銭, 30 銭. 6 ~ 7 円もする上物もある (T8. 6. 27. 中央).

以上, 非常に細かい値段設定がなされていたことがわかる. 本章⑤で後述するが, 明治大正期にはカジカガエルの飼育技術は確立していたばかりでなく, 一層の技術向上の努力が続けられていた. これ即ち長く飼えば, それだけカジカガエルの個体の価値が上昇したことの裏返しでもある.

ただ, 大きな謎として残るのは, 数年以上も飼育され 5 円なり 10 円なりの高額で売られていたカジカガエルは誰が飼育して虫屋なり金魚屋に卸していたか, である. 虫屋自身が鳴かなくて売れ残った若齢個体を飼育し, 翌年以降に高額で売ったのか, それとも飼育愛好家が資金稼ぎに老齢個体を虫屋に持ち込んでいたのか? 筆者はこの疑問を解決する新聞記事を今のところ見つけていない.

なお, 野外で捕れたての個体であっても, それが大きな老齢個体であれば, それなりに高く取引されたはずである. カジカガエルの体サイズは飼育年数と強く関係するが, 体格の良さもまた価格に影響を与えていた要因である. ただ, 単純に大きければ良いと言うものでもなかったらしい.

カジカガエル飼育のプロに言わせれば「身体の丈短く, 咽喉太く, 姿勢の正しいものが善良. 身体長く咽喉の細いものは劣等」(M36. 6. 27. 読売)「成るべく短くて平均八・九分で喉の極大きく姿勢のよいのを選ばねばならぬ」(T10. 8. 11. 東京朝日)とのこと. どうやら体がずんぐりむっくりな個体がより良い声で鳴く個体とされていたようである.

近代日本にはカジカガエルを後生大事に 5 年も 6 年も飼う愛好家もいた. とすると, その死を悲しみ, 葬儀を行う者が出てきても決しておかしくはないだろう.

④カジカガエル商売の実態

江戸期の虫屋にとってカジカガエルは重要な商品であった(加納, 2011). では, 近代日本におけるカジカガエル商売の実態は如何なるものであったか? 掲載記事の絶対量では鳴く虫とホテルのそれは, カジカガエルをはるかに凌ぐ. しかし, その鳴く虫とホテルでさえ, 記事の中心は市場価格や鑑賞会の案内記事であり, 商売の舞台裏に踏み込んだものは決して多くない. 掲載記事そのものが圧倒的に少ないカジカガエルの場合は尚更である.

商売の実態を示す僅かな記事を見つけた. まず, 誰がカジカガエルを捕獲していたかであるが, 地方の住民が小遣い稼ぎでカジカガエルを捕っていた事例が見つかった. 例えば, 明治末の茨城県諸富野村では年の出始めのカジカガエルを狙って採集に従事する者が多いと言う (M45. 4. 8. 東京朝日). また, 昭和初期の秩父では, 冬季に木こりや猟師が岩を動かし, 石をおこし, 木株を掘って冬眠中のカジカガエルを捕まえていた (S2. 7. 12. 読売).

東京に移送されたカジカガエルを扱ったのは, 虫屋のほか鳥屋や金魚屋であったが (M33. 6. 11. 萬朝報), 時には館屋もカジカガエルを売っていた (M25. 8. 14. 読売). また, カジカガエルが町の小売り市場に出回り始めたのは 5 月 20 日より少し前, ないしは梅雨入り頃だったと言う (M33. 6. 11. 萬朝報; M36. 6. 25. 東京朝日).

小売りの儲け率については殆ど記事になっていない。筆者が見つけたたった一つの数字は卸値 1 頭 10 銭なのに対し、売値は 25 銭であるとのものだけだ (M33. 6. 11. 萬朝報)。卸値の 2.5 倍で売れるわけだから、儲け率は一見かなりのものである。ただ、商売の間も手間暇かけてカジカガエルに生き餌をやり続けなければならないことを考えると、実際どこまで儲かったのかは不明である。

カジカガエルが売られていたのは主に縁日や夜店であったが、固定の店舗でも売られていたのかどうか？最もわからなかったのはカジカガエルの商売規模だ。1 件の虫屋が 1 年に何頭のカジカガエルを扱って、どれだけの売上をたたき出したのか、それを窺わせる新聞記事を今のところ見つけきれていない。唯一知り得たのは、明治 20 年、カジカガエルの産地として知られていた山梨県南巨摩郡柳川および小室近郊産のカジカガエル 300 頭が東京の虫屋と鳥屋に渡った、との数字だけである (M20. 7. 28. 読売)。

以下憶測になる。一か所の産地から東京に送られるカジカガエルが全部で 300 頭と言うのは数として決して多くなく、カジカガエル売りは商売規模としては小さかったものと思われる。本章①でカジカガエルはすぐに品薄となり価格が高騰したと述べた。これは流通量が絶対的に少なかったことも原因の一つではなかるうか。

⑤新聞記事から読み取れる近代日本のカジカガエル飼育法

メダカやスズムシと異なり、現代でも原則生き餌を必要とするカエル類の飼育は初心者が容易に手を出せるものではない。これは戦前期の日本では尚更であったはずだが、明治期にはカジカガエルの飼育技術はほぼ確立していた。

まず飼育個体の捕獲法だが、採集者は三、四寸の網を用意して川に行く。そして、鳴いているカエカジカガエルを探し出し、カエルの顔の三、四寸前に網を置く。その後、カエルの尻を竹か杖で突いてやれば、カエルは網に勝手に入る。この方法を用いれば 1 日 100 頭ぐらいは捕れると言う (T10. 8. 11. 東京朝日; T10. 8. 13. 東京朝日)。もちろん、カジカガエルの生息密度によるのだろうが、果たしてこの方法で 1 日 100 頭もの個体を確保できるのだろうか。少なくとも筆者には自信がない。

次に大量に集めたカジカガエルを大きな器に入れる。そして、ハエを容器に入れて最初に食ったカジカガエルの個体を第一として選抜する。なぜなら、この個体は人に臆せず元気で栄養が良いからである (T10. 8. 13. 東京朝日)。選抜が必要なのは、カジカガエルの飼育は大変な手間暇がかかるので、捕獲した個体全部を養いきれないが故であろう。

次に、カジカガエルに与えるエサであるが、ハエ、普通のクモ、フクログモ、ハサミムシなどが良いとされていた。野外から生き餌が入手にしにくい場合は、釣り用のウジでよいとの解説もある (S13. 6. 29. 都)。これらの生き餌のうち、明治・大正・昭和戦前期の新聞記事でカジカガエルに与える最適の餌として紹介されるのは大概ハエなのだが、「フクログモが最も良い」と言い切る飼育専門家もいた (M36. 6. 28. 読売)。なお、1 日に与える餌の頭数であるが、これは殆どの記事で 5~10 匹程度と書かれており、飼育愛好家たちの意見が一致している。

餌のやり方にもっとこだわる達人もいた。達人によれば、まずカジカガエルを捕獲してから 3 日ぐらいは餌をやらない。すると大人しくなる。その後、ハサミムシを半分に切り与える。しかし、餌をやりすぎると鳴かなくなるので、程々にせねばならぬ、とのことらしい (S12. 6. 16. 東京朝日)。

両生爬虫類を飼育する際に厄介な越冬についてである。明治期には土瓶を使った越冬法が考案されていた。土瓶に落ち葉や石、冬の間枯れない程度の水を注ぎ、そこにカジカガエルを入れた後、縁の下に穴に半分ぐらい埋めておけばよいと言う (M36. 6. 30. 読売; S12. 6. 16. 東京朝日)。もっとも、越冬させずに温室で飼育し、年から年中鳴き声を楽しむ飼育法も既にあった (T10. 8. 13. 東京朝日)。

飼育へのこだわりは容器にまで及んだ。盆栽の中でカジカガエルを飼育し、昼は枝ぶり葉ぶりのおもしろきを愛し、夜は音色を楽しむとのやり方もあったが (M32. 6. 18. 東京朝日)、大概是カジカガエル専用の容器を準備した。その一つが「かじか籠」と呼ばれるもので、その辺の適当な箱で飼育す

るのはダメだと言う。その理由は「これは茶味が合った趣味のものでありますから（飼育容器も）十分上品であらねばならない」だからだそう（T10. 8. 13. 東京朝日）。なんともはやである。

近代のカジカガエル飼育マニアのこだわりはこれで収まるはずもない。飼育容器には那智石ないしは木炭を入れるか、または黒い岩石で造られた容器を使わねばならぬと言う。ご丁寧なことに木炭は良く洗ってから使いなさいとの指示も書かれている（S2. 7. 12. 読売; S12. 6. 15. 東京朝日）。プロの飼育家が黒系の色を指定している理由ははっきりしている。「河鹿の白茶けた色は感じの良くないもの」だからだそうである（S2. 7. 12. 読売）。もちろん近代の愛好家たちはカジカガエルがある程度背景に合わせて体色を変えることを知っていた。

驚愕したのは、明治の時点で具合が悪くなったカジカガエルの治療法まで考案されていることである。カジカガエルが病になれば、彼らはヨダレをたらし手でふこうとするので、病気になったことがわかる。その場合、まず水を多くしてカジカガエルを強制的に泳がせる。次にフクログモを与えれば、病を吐かせられるのだそう（M36. 6. 30. 読売）。この治療法で体調不良のカジカガエルをどこまで回復させられたのかは不明だが、それにしても大したものである。近代日本のカジカガエルの飼育愛好家たちの熱情は現代人の両生類飼育マニアに決して劣るものではないだろう。

⑥皇室へのカジカガエルの献上例

近代日本では、鳴く虫やホタルを庭に放して愛しんだ政財界の要人や高級軍人、皇族、華族、知識人は少なくなかった（保科, 2017b; 2018）。カジカガエルの飼育や鳴き声鑑賞もまた上流階級者の間で風流として好まれた動物である。例えば、明治大正期の劇作家の長田秋濤（1871–1915）はカジカガエルの飼育が趣味だったと言う（M43. 1. 31. 読売）。また、野田豁通男爵のすみ子夫人は大のカジカガエル好きで、自宅でなんと 99 頭もの個体を飼養していた（M36. 12. 2. 読売）。

明治大正・昭和戦前期、各地から数十万単位の個体のホタルが皇族や天皇家に盛んに献上されていた（保科, 2018）。ここでカジカガエルと天皇家及び皇族との関係に話を絞ると、まず明治 18 年に商家が宮内省に 1 頭 2 円のカジカガエルを納入したとの記事が見つかった（M18. 6. 19. 東京横浜毎日）。本章①で述べた通り、2 円の個体と言えばかなりの上物の個体である。記事の内容からして、これは臣民の天皇家への献納ではなく、宮内省からの発注に応じた納品だったようである。

大正天皇はカジカガエルを好んだらしい。大正天皇の皇太子時代の明治 33 年 5 月 23 日から 6 月 2 日まで、皇太子及び皇太子妃は三重、奈良、京都を公式巡啓した。皇太子と巡啓に同伴していた有栖川宮の二人は加陽宮殿下宅を訪問したのち、宇治橋で降車した。そして御裳川あたりに多くいたカジカガエルを御覧になった。有栖川宮が蝙蝠傘をカジカガエルの近くで振ると、カエルは飛び跳ねた。東宮はその光景を大層面白く感じ、とうとう 2 頭のカジカガエルを捕らせたと言う。新聞記者は「河鹿も亦榮なり」と記した（M33. 5. 29. 東京朝日）。皇太子は有栖川宮への依存心が強かったが（原, 2000）、こう言った何気ない触れ合いもまた、二人の仲を親密にしたのかもしれない。

皇太子時代の大正天皇のカジカガエルにまつわるエピソードは他にもある。東宮の青山御所には献納されたカジカガエルが放流されていたが、中々鳴いてくれなかった。皇太子は毎夕耳を澄ませていたが、明治 42 年は幸いなことにカジカガエルが良く鳴いてくれた。皇太子はその清興に大変満足されたと言う（M42. 6. 28. 読売）。

次の昭和天皇の生き物好きはここで説明するまでもないだろう。昭和天皇の皇太子時代の大正 2 年、東宮殿下は弟宮の淳宮、光宮殿下、そして学習院初等科生徒 140 名と共に多摩川上流の日向和田方面へ遠足し、川でカジカガエルの声を鑑賞された。一行は次に青梅町へ向かった。そこで町からはカジカガエル 2 籠、成木小学校からは同じくカジカガエル 100 頭の寄贈を受けた。この遠足では東宮は学生としての資格で参加していたので、受納したのは学習院であって東宮殿下ではなかった（T2. 5. 8. 東京朝日）。しかし、実質カジカガエルの天皇家への献納事例に数えてよいだろう。なお、東宮殿下は持ち帰ったカジカガエルを天皇皇后両陛下に献上したと言う（宮内庁, 2015a）。

そして昭和2年、西多摩郡三田村では数千匹ものカジカガエルを捕り、その中から優秀な個体 110頭を選抜し、宮内省に献上した。それらのカエルたちは赤坂御所に放されることになった。三田村は昭和天皇が東宮時代にもカジカガエルを献納したことがあり、今回が2度目であった。(S2. 7. 8. 読売)。残念ながら昭和2年に献上されたカジカガエルを昭和天皇がどう扱われたのか、『昭和天皇実録』(宮内庁編, 2015b)には関連記述がない。

なお、天皇家及び皇族への直接献納ではないが、明治神宮にカジカガエルが提供されたことがある。昭和2年7月29日、西多摩、北多摩の青年団が、キリギリス、スズムシ、クツワムシ、カジカガエル等を神前に供えた。鳴く虫やカジカガエルを明治神宮に供える鳴虫奉献式は意外にもこの時が初めてであったと言う(S2. 7. 29. 東京朝日)。

⑦カジカガエルの鳴き声鑑賞会

大正以降、鉄道会社が企画するホタル狩りが盛んに開催された(保科, 2018)。しかし、カジカガエルの鳴き声鑑賞会が新聞記事になった事例は決して多くはなく、多少散見される程度である。

まず、明治30年に京都平安神宮西苑の「錦蛙会」の有志者が大文字点火に合わせ、カジカガエルの鳴き声鑑賞の催しをすることになったとの記事がある。ただ、これを伝え聞いた多数の老若男女が催しに集まったが、聴衆の騒々しき故か、カジカガエルは全く鳴いてくれなかった。記者は「不風流極る話といふべし」と小馬鹿にしている。悔しい思いをした会主は「次回こそは風流韻致を尽くす」と意気込んだそうだ(M30. 8. 21. 読売)。

明治31年には京都嵯峨野でカジカガエルを売りにした川開きが企画された。嵐山三軒屋株式会社、嵐山倶楽部、嵐山温泉株式会社などが川開き催しを開催した際、カジカガエルが鳴く河原に花火が仕掛けられた(M31. 7. 4. 大阪毎日)。ただ、普通に考えればカジカガエルは花火の音に驚いて逃げまわらず、観客がカエルの鳴き声を無事楽しめたかどうかは定かでない。

次は明治終わりの東京。明治38年にカジカガエル愛好家らによって好蛙会が結成された。この年には上野公園三宜亭、翌39年は阪本公園内一心亭にて会合が開かれた。同39年の「河鹿啼合会」ではカジカガエル愛好家の小説家である広津柳浪(1861-1928)も参加したと言う(M39. 6. 22. 毎日; M39. 6. 28. 読売)。

上述の如くカジカガエルの鳴き声の鑑賞会の催しがしばしば開かれていたわけだが、人々は飼育籠を持ち寄って町中で鳴き声を楽しんだことが多かったようだ。今のところ筆者は鑑賞会の主催者があらかじめ準備した大量のカジカガエルを川に放流した、との記事を見つけていない。ホタルやスズムシと異なり、単価が高いカジカガエルは大量購入及び野外の河川への放流に向いていない、ということだろうか。

また、鑑賞会とはやや異なる話だが、昭和10年代の別荘地分譲でカジカガエルの声が聞けることが客に対して売りにされた事例がある。愛知県入鹿湖畔の別荘地分譲では、開発側の大西土地拓殖株式会社はカジカガエルの存在を盛んにアピールしていた。新聞広告には「世紀の河鹿郷別荘地大分譲」とデカデカと書いてある(S12. 10. 18. 読売)。

このように近代日本の知識者階級や富裕層はカジカガエルを愛好したわけだが、一般大衆もまた同様であった。日本でラジオ放送が始まったのは大正14年3月22日であるが(竹山, 2002)、昭和10年代に入ると、マツムシやカンタン、カジカガエルの鳴き声が盛んにラジオ放送されるようになる。

昭和10年、群馬前橋放送局がカジカガエルの鳴き声を放送した。下仁田鑛川の河原に吸収マイクを2つ、アナウンスマイクを1つ仕掛けたと言う(S10. 7. 8. 東京朝日)。その後、毎年のように秋田や仙台、長野、兵庫などからカジカガエルの声がラジオの前の国民に届けられた(S11. 6. 4. 都; S12. 6. 2. 東京朝日; S12. 7. 3. 都; S13. 6. 7. 東京朝日; S14. 6. 6. 読売; S14. 7. 18. 東京朝日)。

なお、当時のカジカガエルの鳴き声中継は生放送である。そこで、悪天候の場合はカエルの鳴き声の代わりに小唄を流すなどの準備がされていたことが新聞記事から窺える。

⑧海外に運ばれたカジカガエル

近代日本においてスズムシやホタルは外国に輸出されたことがある（保科, 2017b; 2018）。そして、数は少ないながらもカジカガエルが海外に持ち出された事例がある。例えば、明治 17 年、カジカガエルが市場で品薄となり価格が高騰していたが、これは中国人がカジカガエルを買って本国に送ろうとしていたことも一因であったと言う（M17. 6. 14. 読売）。一方、時代は一気に飛んで昭和 10 年代、カジカガエルがインドネシアに観賞用動物として移送されたとの記録がある（S12. 5. 14. 大阪毎日）。

残念ながら新聞記事にはカジカガエルが輸出後に現地で人気を博したのか否か、またはそもそも無事外国に辿り着けたのか等の後日談は記されていない。何頭程度のカジカガエルが国外に持ち出されたのかも新聞記事からは窺い知ることはできない。

IV. 引用文献

- 原武史, 2000. 大正天皇. 朝日選書. 293 pp.
- 保科英人, 2017a. 近現代文化蛩学. さやばね, (26): 38–46.
- 保科英人, 2017b. 鳴く蟲の近代文化昆虫學. 日本海地域の自然と環境, (24): 75–100.
- 保科英人, 2018. 明治百五拾年. 近代日本ホタル売買・放虫史. 伊丹市昆虫館研究報告, (6): 5–21.
- 加納康嗣, 2011. 鳴く虫文化誌. 虫聴き名所と虫売り. エッチエスケー. 155 pp.
- 宮内庁編, 2015a. 昭和天皇実録第一巻. 東京書籍. 710 pp.
- 宮内庁編, 2015b. 昭和天皇実録第四巻. 東京書籍. 849 pp.
- 前田憲男・松井正文, 1989. 日本カエル図鑑. 文一総合出版. 207 pp.
- 森永卓郎監修. 甲賀忠一・制作部委員会編, 2008. 明治・大正・昭和・平成. 物価の文化史事典. 展望社. 477 pp.
- 竹山昭子, 2002. ラジオの時代. ラジオは茶の間の主役だった. 世界思想社. 352 pp.